



## 国際標準化スキルの育成は難しい

木戸彰夫 日本アイ・ビー・エム(株)

振り返って見れば、このリレー形式の連載も2年続いたことになる。情報処理学会および情報規格調査会のWebで過去の記事を読み返してみると、実に興味深い多種多様な経験談が語られてきたことが分かる。それらは貴重な経験から導き出された知見であり、ぜひ今後国際標準化にかかわる後進に伝授したい知識やスキルであるのだが、恥ずかしい話筆者自身いまだに後進の育成は上手くいっていない。今回は筆者が普段感じている後進の育成の難しさについて語ってみたい。

標準化に限らず、よく「国際会議は言葉の壁があるから大変だ」という声を耳にする。しかし面白いことに、そう言う人にかぎってTOEICなどの英語の試験の点が高いことが多い。言葉の壁って、そんなに英語がお上手ならば、と発音・文法ともにいっこうに進歩しない筆者は思うのだが、ご本人はいたって真剣である。たぶんこういう方は英語が苦手なのではなく、国際会議が苦手なのだと思う。国際会議の技術を教えてくれる良い教科書や教室があるといいのだが、残念ながら日本ではそういった教育はあまり行われてはいないようである。発言の求め方、発言の仕方、動議の提出の仕方、動議の採択の仕方、相手の発言に対する明確化の求め方、ブレークの取り方など欧米流の会議の基本的なお作法は学校教育の中で一度くらいそういうものがあるということは聞いた記憶はあるが、どうしてそういうお作法があるのかという理由を教わった、もしくは実際にそういった作法を使ってみたという記憶は筆者にはない。

となると、日本からの参加者にとって欧米流の会議の技術を学ぶ機会は国際会議への参加というOJTを通してのこととなる。会議の上手な参加者の発言を聞いていると、質問をしたり、ブレークを入れたりしながら魔法のように会議の流れをコントロールしていくのだが、その魔法のからくりを教えることはかなり難しい。まず教わる側1人に対して教える側は2人が必要となる。1人が実際に会議に参加し会議技術を使用して見せ、もう1人がどういう意図でその技術を使ったのかをその場で解説しなければいけないからである。また実際の会議は駆け引きの中で行われているので、たとえ日本語で解説を行っても相手側に聞かれてしまう危険がある。できれ

ば国連が世界の子供たちを集めて行っている模擬国連会議のようなものを国際標準化組織でも行い、今後国際標準化に携わる可能性のある後進の指導のために役立てられればいいのだが、なかなかそういった機会がないのが実情である。

会議技術のほかに筆者が伝承が難しいと認識しているスキルに、不要な標準を作らないスキルというものがある。驚かれる方も多いかもしれないが、筆者の20年の標準化の経験の中で標準を作るというポジティブな活動はたぶん20%程度であり、残りは不要な標準を作らないための技術者としては楽しくない努力に費やされてきた。標準化は相互運用性を確保するために必須ではあるが、目的を同じくする数多くの標準ができてしまうと当初の目的を果たすことができない。結局標準がないのと同じことになってしまう。また早過ぎる、もしくは不必要な標準化は技術の進歩を止めるという危険性を持つ。標準化を行う際には曖昧性の排除を行うのと同程度に、強い自制心を持って決め過ぎてはいないか不必要な標準を作っていないかと常に自問し、標準が規定する範囲を必要不可欠なものだけに限定する必要があるのだが、この作業は技術的にすばらしいものを標準として世に出したいという欲求との戦いになる。すばらしい技術を世に出したいということは技術者の根源的な欲求であるので、標準を作る仕事をさせながら標準を作らない努力を強いることは、後進の標準化への情熱を奪いかねない。こういった自分を律するスキルは、ある程度経験を積んだ技術者であれば自然と身につけるものではあるが、それを待たなければならないとすると、標準化は若い技術者が入っていきづらいつら老成した技術者の仕事になってしまう。国際標準化にかかわる技術者の若返りのためにもぜひとも解決したい課題である。

(平成19年12月21日受付)

木戸彰夫(正会員) | KIDO@jp.ibm.com

1989年より情報規格調査会にて、プログラム言語とその環境、および文字符号関連の国際規格制定作業に参画。2006年規格理事に就任。日本工業標準調査会標準部会情報技術専門委員会委員。